

2019年度短期大学部自己点検・評価（幼児教育学科）		
短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
基準Ⅰ 建学の精神と教育の効果		
A 建学の精神		
1 建学の精神		本学では 週に2回チャペルアワーを設け、継続的に活動を行っている。またキャンパス内に掲載されている建学の精神の言葉を、学生は日常的に目にすることができる。入学式や卒業式、クリスマス礼拝や実習激励会など、学生生活の様々な場面において建学の精神に則り実施されている。
2 地域貢献		産学官連携の長良川鉄道「あそびすたートレイン」と「ぐじょうファミリーフェスタ」、本学ならではの「多胎ファミリーフェスタ」、その他多くの行政との地域課題解決提案事業を、専門ゼミナールや有志によるボランティア活動で推進している。このような保育に関する多岐にわたる活動は内外からの評価も高い。
B 教育の目的・学習効果		
1 教育の目的		本学科では、保育実践力と人間関係力を育成することにより、保育士資格と幼稚園教諭2種免許状を基礎として、幼児教育・保育に関係した4種の資格を授与している。これらの取得資格を活かす就労に結びつけることを目指す。そして頑強（タフ）な人材として生涯にわたり社会貢献できる能力を育成することを目的とする。
2 学習成果	・多様化する学生への対応	2019年度は、2018年度に続き職業訓練生16名を受け入れた。年齢や社会経験の違いを学生達に意識させず、むしろ生かす形で教育するよう努力している。また、個別に学修支援・生活支援を必要とする学生も増加傾向にある。適切な支援に努めている。

2019年度短期大学部自己点検・評価（幼児教育学科）		
短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
	・離職者訓練 制度入学学生 の学習	大学での学習や生活における様々な学則などのオリエンテーションを行い、一般学生と共通する事項のみならず、別枠で訓練生のための時間を設定し、教職員の連携支援体制を強化してきた。
C 教育の効果		
1 アセスメント結果活用 の推進		毎年、経年的にテストを実施することで、学習成果や学生生活を把握するための検証となり、幼児教育学科の強みや課題を見出すことができた。
基準Ⅱ 教育課程と学生支援		
A 教育課程		
1 教育課程編成・実施の 方針	・コースの見 直し	専門ゼミナールでは分野別に3つのコース制を採っている。2019年度はフィールドでの活発な活動により、保育者としての専門性を高め、近年の多様な保育現場への対応が可能となった。
	・学科の独自 性を生かした カリキュラム	産学官連携の「郡上ファミリーフェスタ」や「長良川トレイン」「多胎ファミリーフェスタ」への学生参画を、コミュニケーション力育成のための学科独自のカリキュラムとした。さらに、多様な保育実践をカリキュラムに取り入れることで、学生の専門職観を明確にすることができた。
2 入学者受け入れの方針	・学生募集の 方針と現状	アドミッションポリシーに即して入学生の定員確保に努めている。自己実現入試、推薦入試、指定校入試いずれの実施に際しても個人ないしグループ面談を実施している。 離職者訓練生の受け入れも3期目を迎え、順調に訓練生の入学者も確保している。これらの結果、入学予定者数は現役高校生70名、留学生1名、離職者訓練生12名となった。

2019年度短期大学部自己点検・評価（幼児教育学科）		
短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
3 受験生に対する受け入れ方針の明確化	・オープンキャンパス	2019年度は、オープンキャンパスを5月から10月まで毎月1回、全6回実施した。入学生が掲げる本学科の魅力は、学生と教員との信頼感が厚いということである。この魅力を受験生にも体感してもらえるように、毎回30名ほどの学生を動員した。模擬授業と演習を在學生と共に体験することにより、受験生に本学科の特徴を伝えことができた。さらに、個別相談では、本学科の受け入れ方針を個々の受験生と保護者に伝えることができた。
	・出前授業	本年度は16件の出前授業の依頼を受けた。短大教員による授業は、高校生にとって入学後の講義内容を知る好機となる。次の段階として、オープンキャンパスへの参加を決定するカギとなっている。
	・高大連携科目（保育・教育はじめの一步）	教育学部と協力して高大連携科目である「保育・教育 はじめの一步」を実施した。特に本年度は、「保育フォーラム」への参加を内容として加え、学生の学びの様子とその意義について教授することができた。本学科からは5名の教員が授業を担当し、講義から実技まで幅広い内容を提供した。本科目は、入学後に大学の単位として認定されるメリットも付加されている。
	・高校生向け表現講座の取り組み	2019年度は7月25日（木）午後実施した。講座内容は、①“人と人がつながる”表現・あそびのワークショップ②音楽と造形との表現あそび（ペーパーアート・絵本作り）であった。参加者は25名であった。①では、1年次「教育原理」の授業の一環として学生と合同で行い、大学の授業体験の機会となった。②については、参加者ひとりひとりの作品発表を通して、表現力の大切さを学ぶ機会となった。

2019年度短期大学部自己点検・評価（幼児教育学科）		
短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
	・ 離職者訓練生の受け入れ	本年度は3期生の募集となり、新聞の折込チラシに加え、フリーペーパーへの掲載も行い、広報活動を発展させた。さらに、犬山駅からの無料バス運行の利点を生かし、犬山市へのチラシ配布もおこなった。入試説明会は、教員に加え在籍している訓練生の参加により、入学への不安の払拭に役立った。
	・ 多媒体による広報	出前授業や実習巡回の折に、各教員から本学の学びや特色について説明をした。また、オープンキャンパス等では、在学生から直接本学のアピールをする機会を設けた。さらに、本学科の活動をホームページにアップすることやQRコードを印刷物に貼付することを通じて、幅広い広報となるよう工夫した。
4 学習成果の査定	・ 評価の方法	学習成果に関しては2021年度のルーブリック評価の実施に向けて、2019年度は学生アンケートを実施・分析中である。2020年度にはルーブリック評価の内容を検討する予定である。
	・ 各種実習の成果と新たな取組	各種実習（幼稚園教育実習Ⅰ・Ⅱ、保育実習ⅠA・B、保育実習Ⅱ orⅢ）について事前・事後指導を行うことにより、実習に臨む姿勢を確実にした。また、1年生最初の実習及び2年生最後の実習の直前に実習交流会を開催することにより、各実習についての情報を2年生から1年生へ伝達することができた。2019年度は、学生の現状等に合わせて、実習マニュアル及び実習指導書の見直しも実施した。

2019年度短期大学部自己点検・評価（幼児教育学科）		
短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
5 学生の卒業後評価	・卒業生の把握と卒後教育	例年通り卒業生の進路に関しては、キャリア支援委員およびキャリア支援センターの協力を得て、十分に把握できている。また、2019年度はたのしみん祭のホームカミングデイを利用し、卒後教育の実施を計画した。
B 学生支援		
1 学習成果獲得に向けた教育資源の有効活用	・FD活動への取り組み	2019年度は、短期大学部FD研修会を3回(3回目は教職員合同)持つことが出来た。年間テーマを「気づく力を高める」とし、授業改善や学生対応に向けてのより良い在り方について、グループワークを中心に実施した。学科として離職者訓練生を受け入れていることもあり、多様な学生の支援体制を整えることが重要と思われる。FD研修会はより具体的な学生育ての気づきを持つ機会となった。また、教職協働の面からも成果をあげた。
2 学習成果獲得に向けた組織的学習支援	・入学前教育の取り組み	2019年度入学生の実施から2年目となる2020年度入学前研修は、前年度の課題を踏まえ準備を進めたが、コロナウイルス発生のため、中止となった。今年度は危機管理としての保健室職員の待機や、スケジュールの時間配分について検討を重ねてきた。

2019年度短期大学部自己点検・評価（幼児教育学科）

短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
	・初年次教育	2019年度は、「基礎ゼミナール・ワークブック」をさらに改訂し、初年次教育を効果的に進めた。「大学生活の基本」と題し、1 高校と大学との違い、2 学生生活設計の基本、3 授業の種類についてを冊子としてまとめ、基礎ゼミナールの時間に使用した。また、保育者への学びの入り口として、見学実習（附属3施設）、「あそびすと養成講座」（4講座）を初年次教育の一環としている。学生の書字力向上のために、それぞれの活動ごとに記録（エピソード記録）を取り、常に振り返ることで、学びの可視化に努めた。
	・新入生研修	1年次基礎ゼミナール授業の一環として、4月24日に実施した。研修内容は、①「郡上市の子育て」についての講演・②水野政雄氏によるあそびのワークショップ（郡上市総合文化センター）・③ゼミグループ散策（郡上市街地）であった。成果として、学生のコミュニケーション能力を高め、大学生活への早期適応を図ることができた。
	・ゼミナール運営の課題と取り組み	1・2年生の各ゼミナール活動が2年間の学びの構築となるように、今年度も保育フォーラムで、それぞれの1年間を振り返っての発表とした。2年専門ゼミナールのコース分けに関しては、全教員で一人ひとりの希望を確認した上で、決定している。ゼミナール活動に対する学生の満足感を高めることに努力している。
	・教職実践演習の充実に向けての取り組み	今年度は、保育教育関係者や卒業生を外部講師として講演依頼したことで、学生の保育・教育への熱意と使命感を高めることができた。また、第10回保育フォーラムでのプレゼンテーションを企画することにより、情報の発信・共有についても学ぶ機会となった。

2019年度短期大学部自己点検・評価（幼児教育学科）		
短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
	・ボランティア活動の推進	2019年度学生によるボランティア活動への参加は、学科による組織的学習支援として16件実施した。成果として、本学のディプロマポリシーにおける具体的な姿である地域活動の活性化と貢献力の育成に寄与した。
	・保育フォーラムの充実と課題	本年度は、2020年1月25日に実施した。各ゼミが1年間の活動報告や卒業研究の発表を行った。その後、「本学での学びが現在の仕事にどのように活かされているか」というテーマに基づいて卒業生による講演を実施した。講演を通して、1年生は卒業後の進路に向けて、2年生は4月からの働く姿をイメージすることができた。
	・新沢としひこ客員教授特別講義	本学客員教授の新沢としひこ氏による学生への講演は、2010年より継続しており、学生のみならず、卒業生、地域の保育者を支援している。本年度は特別講義であり、保育士に必要な子どもとのコミュニケーションを音楽を通して多様に実践する方法を学ぶことができた。
3 学習成果獲得に向けた学生への組織的な生活支援	・学生生活支援（修学支援資金の獲得と取得者の学修状況）	「岐阜県保育士修学資金貸付制度」では、窓口である学生課とゼミ担当者により、必要とする学生への手続きの支援を行った。受給者のうち、1名が自己都合退学となったが、その他の学生については学習状況は良好である。その他の奨学金については、申し込みや返済の説明のみならず、学生の学修状況に合わせた指導を行っている。

2019年度短期大学部自己点検・評価（幼児教育学科）		
短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
	・学習支援	学習上課題のある学生について、学科会議等で共有し、ゼミ担当教員が中心となって学生相談室や学生支援室につないでいる。学生相談室や学生支援室につながった学生は、専門スタッフの支援を受けながら、学習や生活のサポートを受けることができた。その結果、学生は講義を欠席することなく単位を取得でき、卒業に結びついている。
4 進路支援	・就職100% に向けた取り組み	2019年度の就職内定率は2018年度各月の内定率とほぼ同様に推移し、学生が希望する就職先への内定が決定していった。就職率は100%となり、18年連続で100%を達成している。
	・編入試験の 受験を促す取 り組み	編入学の仕組み、および編入のメリットの周知を、4月のオリエンテーションのキャリア教育に組み込んだ。同一法人の四年制大学に留まらず、外部の大学への編入の可能性について、入試広報課、キャリア支援センターの協力も得て、東海圏の保育・教育系の編入試験実施大学をピックアップしている。
基準Ⅲ 教育資源と財的資源		
A 人的資源		
1 教育課程編成・実施の方 針に基づく教員組織の整備	・専任教員の 業績の充実	2020年度科学研究費への申請については、現在研究中の1名以外の専任教員9名全員が応募している。科研費以外の外部研究資金への挑戦はなかった。

2019年度短期大学部自己点検・評価（幼児教育学科）		
短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
	・教員研修の 推進	保育者養成に関する情報を共有するために、保育士養成協議会全国セミナー（2名）、中部ブロックセミナー（2名）、保育研究所研修会（1名）全3回に代表者が参加した。 初年次教育を充実させる方法の一つとして、基礎ゼミナールのワークブックを作成した。これを活用することにより、学生教育の充実を図ることができた。
その他	・地域連携活 動の充実（長 良川鉄道との 連携）	これまで10回に及ぶ「“あそびスター” トレイン」の成果を受け、今年度長良川鉄道との連携協定を締結した。それぞれの専門ゼミナールにおいて郡上市との連携活動である「ぐじょうファミリーフェスタ」や「多胎ファミリーフェスタ」、美濃加茂市「子どもフェスタ」など多様な地域のイベントに主体的に取り組んでいる。
	・国際交流活 動の実施	タイ交流旅行については、全学的な国際交流委員会の内容ではあるが、幼児教育学科として、保育の観点から重点的に進めていくことになった国際交流活動である。毎年続いていたが、2019年度は、人数が集まらず、不履行となった。

2019年度短期大学部自己点検・評価（社会福祉学科）

短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
基準Ⅰ 建学の精神・教育の効果		
A 建学の精神		
1 建学の精神		<p>本学では 週に2回チャペルアワーを設け、継続的に活動を行っている。またキャンパス内に掲載されている建学の精神の言葉を、学生は日常的に目にする事ができる。入学式や卒業式、クリスマス礼拝や実習激励会など、学生生活の様々な場面において建学の精神に則り実施されている。</p>
2 地域貢献	<p>・地域連携活動の推進</p>	<p>教育活動を中心とした地域連携活動では、自治体及び関連機関、大学周辺自治会や老人会、福祉施設、企業等との交流・協力を引き続き行っている。介護福祉コースは、地元高齢者の授業参加や基礎ゼミナールや地域総合演習での交流や課題解決型のゼミ活動が中心である。美・デザイン、医療事務コースでは、関市観光協会や長良川鉄道と連携した広報活動等に授業を通じて取り組んでいる。学生の達成意欲も高く、また、これらを通して地元自治体や住民、企業等との連携を強め、その実績に対して補助金支援や協力を得ている活動も出ている。岐阜県との連携事業では、2019年度も介護福祉関連の委託事業や人材確保・育成に関する補助事業を受け、学科の特性を活かした社会貢献に取り組んでいる。</p>
B 教育の効果		
1 教育の目的	<p>・コースの教育目的の具体化</p>	<p>介護福祉コースでは、学科会議での協議を踏まえて、前年度に引き続き1年次の初年次教育、介護福祉士指定科目での中間試験の実施、2年次における国家試験対策講座など、介護福祉士資格取得の基礎力向上の学習体制整備を進めた。この結果、国家試験合格率は前年度に比較して向上している。</p> <p>美・デザイン、医療事務コースでは、科目をまたいだ地域連携活動の推進として、関市観光協会の広報を複数科目の担当教員が協力し、学生が作成した動画を同協会ホームページで公開するなどの成果を得た。</p>

2019年度短期大学部自己点検・評価（社会福祉学科）

短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
2 学習成果	<p>・コースの教育目的に関する検討の推進</p>	<p>介護福祉コースでは、地域連携を視野に入れたコースの特色を、主にゼミ活動の内容検討を中心に進めた。また、介護福祉士養成カリキュラムの改訂を踏まえて（短大の場合には2021年度入学生から）、授業に介護ロボット等の福祉機器使用に関する検討を教員間ですすめた。</p> <p>美・デザイン、医療事務コースでは、入学者の多くが医療系事務資格取得を希望するため、資格取得講座を開講したほか、次年度に向けて医療事務関連資格の検討や、関連科目見直しの検討を行った。</p>
C 内部質保証		
学習成果に関するアセスメント		「基準Ⅱ-A 4 学習成果の査定」の項に記載
基準Ⅱ 教育課程と学生支援		
A 教育課程		
1 教育課程編成・実施の方針	<p>・効果的な教育への取り組み</p>	<p>基本的には教育効果を高めるためのPDCAサイクルとして、授業計画段階では昨年度に引き続き、アクティブラーニングなど参加型授業の導入や予習・復習ができる授業計画になるよう全科目のシラバスチェックを行った。また、介護福祉コースでは1年次に留学生が23名入学することを踏まえ、2018年度末に教員懇談会を開催し、指導方法や教材、評価、学習支援の基本視点などの共有化を図った。</p> <p>美・デザイン、医療事務コースでも、インターンシップや各種検定の受験などの学習活動と学生の現状を踏まえた支援体制について、新年度5月に教員懇談会を開催している。学習成果の確認・評価については、実習、インターンシップの中で成果を可視化する評価表や報告会を設け、学生自身の振り返りができるよう取り組んでいるほか、2年間の学習成果を確認するために、ディプロマポリシーの内容を踏まえた質問紙調査を卒業時に実施した。</p>

2019年度短期大学部自己点検・評価（社会福祉学科）

短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
	<p>・実習施設等との連携推進による効果的な実習教育と学生の実習満足度の向上</p>	<p>実習指導者の研修とともに大学と実習施設との情報交換の場として、「実習教育研修会」を毎年開催している。今年度は7月27日（土）に開催し「留学生を含む多様な学生に対する介護実習教育の方法及び指導体制」をテーマとして開催した。また実習期間中の巡回指導の際に、学生状況について実習指導者と情報交換を行いながら、学生の個性を踏まえた指導をしている。学生は、実習後に評価シートを用いた自己評価をすることで、実習の成果と課題を客観的に把握し、次の目標設定に活用している。</p>
	<p>・有給インターンシップの整備・充実</p>	<p>美・デザイン、医療事務コースでは、両コース合わせて新入生9名（全員）と昨年度履修できなかった学生1名が参加した。今年度の取り組みとして、受け入れ側と協議して最低実施条件を90時間から180時間に引き上げた。その結果、全員が180時間を達成した。内容的にもギフト関連業務に就いたメンバーを中心に高評価を得ることができた。なお、参加者のうち半数以上は有給インターンシップ時間枠上限の270時間を終了した。</p>

2019年度短期大学部自己点検・評価（社会福祉学科）

短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
	<p>・各コースの教育充実の取り組み</p>	<p>介護福祉コースでは、留学生が多数入学したことを契機に、一般学生に対しても「より分かりやすい授業」となるよう取組んだ。具体的には、①できる限り専門用語及び読解し難い用語にルビを付けた資料を提示・配布すること、②教員が、文章の内容を正確に読み取りやすい話し方をすること（起承転結のはっきりとした説明をできるだけ短文ですること）③授業の目的及び到達目標を明確に提示すること、④ミニテストを適宜、できるだけ多く実施し、学生の学習意欲を維持しながら知識の積重ね学習を促進することに努めた。</p> <p>美・デザインコースでは、ネイルケア・ネイルアートやメイク&ヘアアレンジメントなどの実技系科目に映像プレゼンテーション、ブライダルマネジメントなどの体験型科目を配置している。ネイルケアなどの実践資格取得を目指す科目では資格受検を意識した講義内容を準備し充実を図った。本年度、医療事務コースを新設し、医療事務、調剤事務の演習について充実を図った。両コース共有の科目として、「有給インターンシップ」は全員参加のシステムを構築し、就業力の強化を図った。1年の基礎ゼミでは基礎表現力の充実を目指し学生が自ら提案・発信できる実践的就業力養成を図った。</p>

2019年度短期大学部自己点検・評価（社会福祉学科）

短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
	<p>・留学生の学習支援</p>	<p>2019年度より留学生が23名入学した。それに伴い、次のような支援を実施した。①理解が難しいと思われる「介護過程Ⅰ」「介護過程Ⅱ」は「留学生クラス」を設けた。学生の理解度にあわせ授業のスピードを調整したり、難解な用語を平易な言葉に置き換えたり繰り返し説明したりするなど柔軟な対応ができた。②講義で使用する書類にはできるだけルビを振る配慮をした。漢字の読み方が分かることで学生が自ら言葉を調べられることから、自主学習につなげられるような環境づくりとなった。③留学生の学びをサポートする「介護学習の基礎」「介護の日本語」の2科目を新設した。1週間の学びで分からなかった言葉などを科目を横断して質問できたり、日常生活での不安や悩みを吐露できる機会となっている。また、介護の現場で使用する日本語を継続的に学ぶことが専門的な学習へと繋がっている。④「留学生日誌」を毎日記入させた。日本語で表現する機会を毎日設け、週に1度基礎ゼミナール担当教員が文章を添削した。学習面以外にも日常生活での出来事や困りごとなど自由な記入を認めた。日誌から学生の表現力や日常生活状況を把握することにもつながった。⑤実習巡回担当を学科の専任教員が担当することで、慣れない学外での学びを支えている。</p>
	<p>・教養教育と専門教育の接合</p>	<p>社会福祉学科の各コースでは、卒業単位の中で教養科目（基礎科目）を16単位と設定した上で、コースの専門性や活動を踏まえて科目選択を指導している。特に、介護福祉コースでは、心理学や社会学などの基礎教養科目の内容を専門科目との関連で検討し、内容の接合を図っている。また、上述の留学生を対象とした支援科目を基礎教養科目（「介護学習の基礎」「介護の日本語」1,2学年通年）に設け、専門科目での学習理解向上に取り組み、学生個別の課題を聞き、対応する機会にもなっている。さらに、「美濃・飛騨のふくし」という科目では、美・デザインコースの学生も履修し、地域活動の取組にも繋がっている。</p>

2019年度短期大学部自己点検・評価（社会福祉学科）

短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
2 入学者受け入れの方針	・ 学生募集の方針と現状	<p>入学者受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）が受験生に伝わるように、募集要項や大学ホームページに公開している。また、オープンキャンパスや離職者訓練制度による入学希望者を対象とした説明会などで、学科教員が入学希望者やその保護者に対して説明をし、不明な点などに応えるなど相談機会を設けている。その結果、入学予定者数は、日本人の高校生42名・留学生33名・離職者訓練生13名であった。</p>
3 受験生に対する受け入れ方針の明確化	・ 高大連携講座	<p>介護福祉コースでは、済美高校の普通科健康福祉の2、3年生を対象に「めざそう快護人」講座を開講した。講座内容は本学で学ぶ基礎的な内容が含まれているため、修了した生徒には本学入学後に一般教養科目として単位認定している。また、介護及び美・デザイン、医療事務コースにおいて、啓晴高校の1年生を対象に講座を実施した。計5回の講座のうち2回（6、9月）をオープンキャンパスの模擬授業に参加してもらうことで、本学の受け入れ方針も同時に伝える機会とした。</p>
	・ オープンキャンパス	<p>介護福祉コースは関Cで、美デザインと医療事務コースは各務原Cでおこない、入学後に学ぶキャンパスを知る機会とした。また学びが分かりやすく伝わるように、学生スタッフを多く取り入れた。毎年リピーターが多いことから模擬授業と体験コーナーの内容を毎回変更し、学ぶ内容を多く知る機会とした。高校3年生の合計参加実人数は、介護福祉コースで30人、美・デザイン 医療事務コースで30人であった。その中での出願者は、介護福祉コースは25人（83%）、美・デザイン 医療事務コースは15人（50%）であった。</p>

2019年度短期大学部自己点検・評価（社会福祉学科）

短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
	<p>・多媒体での 広報</p>	<p>入試広報課主体の広報活動以外に、学科独自で行った広報活動は、大学ホームページ掲載、新聞記事掲載、公共施設でのポスター掲示である。高校宛には、出身学生の近況報告やセミナーなどの参加案内、介護福祉の啓発冊子を郵送し関心が得られるよう努めた。委託訓練生の募集に関しては、新聞折込チラシ、タウン誌を活用した。また、「中高生介護体験セミナー」や「えがお写真コンテスト」を通して、直接高校生が参加できる形での広報活動も行った。美・デザイン、医療事務コースでは、キャンパスブログなどSNSを活用した広報を行っている。</p>
	<p>・留学生受け 入れに関する 活動の推進</p>	<p>介護福祉コースでは2019年度1年生に23人の留学生が入学し学習を開始した。2017、18年度に1名ずつの留学生を受け入れ準備した支援科目や教材、留学生センターと協力した支援体制などから、落ち着いた学習環境が作られている。また、入学した留学生の多くが何らかの形で介護事業所からの支援を受けており、各事業所と定期的に情報交換する機会を設けることで、学習と生活の支援を連携して取り組むことができた。なお、本学では、大学と介護事業所に加え、現地日本語学校の3者が連携して介護人材を育成する「事業所連携型留学生受け入れ制度」を設けており、定期的に連絡会を設けて情報共有と受け入れに向けた検討にあたっている。</p>
	<p>・職業訓練生 受け入れに関 する取り組み</p>	<p>職業訓練生の募集にあたっては、タウン誌に掲載したりチラシを配布するなど積極的に広報活動を行った。また、ハローワークや本学において説明会を実施し、職業訓練の目的や介護福祉士養成校としての学びの特徴を伝えた。その結果、2019年度は17名が入校した。入学後は、4月のオリエンテーションを始め、年に2～3回「訓練生アワー」を、キャリア支援センターと学科教員が連携しながら段階的に実施した。2年生は12名が在籍している。就職活動状況を学科教員が中心に定期的に確認し、キャリア支援センターでの就職面談を通じて、着実に就職活動に繋げていった。</p>

2019年度短期大学部自己点検・評価（社会福祉学科）

短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
4 学習成果の査定	<ul style="list-style-type: none"> ・達成度評価の検討 ・ IRデータに基づく学習成果等の分析 	<p>現時点では、介護福祉コースにおいて、介護技術の修得度のルーブリック評価を基に個別指導をし、学生にフィードバックする体制が機能している。2019年度は、介護職として必要な力である「共感性」を評価する指標作成に向け調査を実施しており、2021年度の完成を目指している。また、「ストレスマネジメント自己効力感」や「コーピング能力」等を評価する指標の作成計画を立て、2021年度の完成を目指している。</p> <p>2019年度にIR推進センターが、2011年度から2018年度入学生についての「入学年度別・入試区分別の退学・休学状況及びその理由」、「試験形式別（筆記・レポート・実技別）のGPA」に関する学科別データをまとめた。前者のデータより、学科ごとの分析結果及び検討資料が提示され、学科として現状についての考察を加えながら休学率、退学率を下げるための具体策の検討に入った。他方、後者のデータより、成績評価に偏りのあること（レポート試験＞筆記試験＞実技試験）が指摘され、成績評価及びGPA評価の客観性を高める必要性が示された。</p>
5 学生の卒業後評価（卒業教育の取り組み）	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業生の把握と同窓会の組織化 	<p>10月19日（土）開催の「大学祭・たのしみん祭」で学科コーナーを設け、学科卒業生間及び教員との交流・情報交換の機会とした。また、キャリア支援センターによる卒業後評価（就職先の満足度調査）により学科の一部卒業生の状況を確認した。</p>

2019年度短期大学部自己点検・評価（社会福祉学科）

短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
	<p>・ 卒後教育 (介護福祉セミナー)</p>	<p>「地域と繋がる福祉施設や専門職」をテーマとし「第19回介護福祉セミナー」を2020年3月6日に開催する計画を立てた。しかし、新型コロナウイルスの影響により開催を見合わせることを、2020年2月25日に決定した。なお、介護福祉セミナー開催にあたり、県内の高齢者施設、障害者支援施設、その他関連機関（地域包括支援センター、社会福祉協議会）と2016年度～2018年度卒業生に文書で開催案内をした。</p>
B 学生支援		
<p>1 学習成果獲得に向けた教育資源の有効活用</p>	<p>・ F D 活動への取り組み (授業改善に向けた取り組み)</p>	<p>今年度は、「『気づく力』を高める～教員の教育力向上による授業改善と教職員協働の推進を目指して～」を大テーマに掲げ、3回のFD研修会を開催した。第1回は教員の観察力の向上、第2回は学生の主体的な学習を促す指導方法を検討テーマとし、第3回は教職員合同研修として、多様な学生の支援について検討した。また、学科独自の活動として、2021年度からの介護福祉士養成課程における新カリキュラム導入で必要となる「介護ロボットを含む福祉用具活用」に関する教育方法及び教材の検討を開始した。</p>

2019年度短期大学部自己点検・評価（社会福祉学科）

短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
2 学習成果獲得に向けた組織的学習支援	<p>・入学時の学習適応への支援（入学前研修、基礎ゼミの活動、宿泊研修、その他）初年次教育</p> <p>・国家試験対策</p>	<p>「入学前研修」で事前に大学を訪れ、学生間、教員との交流を図ったことで就学に対する不安の軽減につながった。介護福祉コースの「基礎ゼミナール」は多様な立場の学生を混同して4つのゼミに分け合同学習を軸にすすめ、相互理解や関係構築の一助となった。宿泊研修は学生主体の実行委員によりプログラムを立案・実施した。初年次教育では、基礎学習として文章作成の基本的なスキルの学習とレポート作成プログラムを実施した。段階的にレポート作成ができるよう工夫し、希望者に対しては個別指導を行った。</p> <p>美デザインコースでは、「入学時研修」や「各講義のグループ学習」及び「基礎ゼミナール」、「学内外の行事的活動への参加や企画の機会」を積極的に活用し、新たな人間関係を構築し、コミュニケーション力を身につけること、自己管理能力を高めること、「読む・聞く・話す・まとめる」といった、基礎的な学習スキルを身につけること、能動的で自律的な学習態度への転換を図ることをねらいとした初年次教育を行った。具体的には、基礎ゼミナールで繰り返し漢字検定の問題に取り組んだり、学内外の行事等の事後には振り返りレポートを作成したり学の内容を発表する機会を設けた。また、各自が選書した図書を紹介を図書館に掲示したり、オープンキャンパス時に展示することも行った。</p> <p>1年間の国家試験対策のスケジュールを4月のオリエンテーション時に学生に示し、学生が見通しをもって取り組めるよう、また、成果の上がらない学生の個別指導を充実させるように配慮した取組みが機能し定着している。基礎学力が低く学習習慣に欠ける学生の学習成果が上がらない状況が否めない状況があった。しかし、介護福祉士国家試験の合格率は97.3%で、1名の留学生を除き合格に至った（「2017・2018・2019年度 社会福祉学科 介護福祉士国家試験（筆記試験）結果」参照）。</p>
3 学習成果獲得に向けた学生への組織的な生活支援	<p>学生生活支援の取り組み</p>	<p>発達障害や家庭環境等により学習や生活上の課題のある学生の早期発見・早期介入に向け、学科の学生支援委員やゼミ担当教員が、保健室や学生相談室・学生支援室のスタッフ及び保護者との連絡を密にし、個別面談等をこまめに行った。</p>

2019年度短期大学部自己点検・評価（社会福祉学科）

短大基準協会	2019年度 事業計画	活動内容と成果
4 進路支援	就職率100%に向けた取り組み	<p>2019年度卒業生の就職希望者全員（100%）が就職に至った。介護福祉コースでは、90.2%が介護・福祉職に就いている。美・デザインコースでは、医療事務、調剤事務、一般事務、販売、エステ、運輸等、様々な分野に就職している。</p> <p>就職支援にあたっては、2年次のゼミナール担当教員が主となり、学生一人ひとりの希望を受け留めながら個別対応している。また、学習や就職に困難の見られる学生には、学生カウンセラーや保健室職員と学科教員とが連携し個別支援している。</p>
基準Ⅲ 教育資源と財的資源		
A 人的資源		
1 教育課程編成・実施の方針に基づく教育研究活動	<ul style="list-style-type: none"> ・教員研修 ・研究状況 	<p>教員は、教育・研究力向上に向け、各自の専門分野の学会参加や介護福祉士養成施設協会の全国教職員研修会及び東海北陸ブロック研修会への参加等によって研鑽を積んでいる。その成果として、2019年度は、本学科の専任教員全員（6名）が科学研究費補助金申請を行い、2件が採択された（その2件に学科の専任教員5名が研究代表者もしくは研究分担者として関わっている）。他方、大学間連携協定に基づいた新潟青陵大学短期大学部との共同研究の実施に向け、本学科より先方に、研究テーマ（①3Dプリンタを使用した福祉用具作製教育プログラム構築、②災害時に求められる介護福祉士の役割と教育方法）の提案をした。また、併設する中部学院大学との協力関係の中で海外提携校との交流研究やJAIC草の根プロジェクトによるベトナムでの介護人材養成事業等に関与しての研究を行った。</p>
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・国際交流活動の実施 	<p>以下の国際交流プログラムを計画した。①フィリピン・ミンダナオ国際大学（MKD）との交流・研修、②MKDからの短期留学生2名の受入れ、③愛知県日進市の「アジア保健研修所（AHI）」講師による特別講義（テーマ「アジアの保健・福祉を学ぶ～スリランカ社会における持続可能な平和と開発の取り組み～」）</p> <p>①はフィリピン国内の戒厳令のため中止となった。②は2019年10月9日～23日の15日間、MKD社会福祉学科3年生の2名の学生（男性1名、女性1名）を受入れ、授業聴講や大学行事参加を通して日本の文化や介護について学んでもらうとともに、本学科学生との交流を図った。本学科学生にとって多様な文化及び価値観を学ぶよい機会となった。</p>